

児童と道徳

国定修身教科書批判
尋常一年修身書教師用に拠る

高群逸枝

よく学びよく遊べ

「今は学ぶべき時なれば」

壇上に立つ教師、下に並ぶ生徒、行儀が第一、——こうして威嚇的な空気が醸かまれるのである。

「解しがたいことがあれば、話の終わりを後に、手を挙げて問うべく、みだりに発言してはならない。だが発言の場合にあつては、恥じ臆おそすることなく明瞭に……」

といつてある。が威嚇的な空気と自由な発言とが予盾しないものであろうか。
威嚇的な空気は純粹な発言——疑問のための発言を芽生えのままに萎縮させてしまう。それはみだりに発言ができないからである。

これに引きかえて不純な発言——発言のための発言、自己誇示の手段としての発言を、この空気は助長するのである。すなわち、人に支配されずには生きることのできない、人がほめてくれなければ仕事をするのできない悪習慣が養われる。

遊ぶときもそうである。

「今は遊ぶべき時なれば」

やたらに遊ぶ、機械になつて。

「運動場に出て何ごともなすことなく、いたずらに、たたずみおるはよろしくない」

といい、そんな子を監視する。そこには人間に対する恐るべき無理解の萌芽がある。

そして、人に支配されてむやみやたらに遊ぶ機械的な子を最も健全であると思なすのである。

学校で優等生であつた者は、社会では何ごともなしえないというが、それらの原因は被支配ということを奨励する精神に根ざしているといつてよい。

自発的精神の否定、成長本能に対する無理解が、学校教育の出発点であり、全体であるとすれば、そうした教育の無効果は、けだし当然といわなければならぬ。

一、みなさんが学校にくるのは何のためですか。

二、先生のお話中はどうしていなければなりませんか。

三、わからないことのある時はどうしなければなりませんか。

四、先生にものをいうときには、どんなふうにいわなければなりませんか。

五、運動場ではどんなにして遊ぶなければなりませんか。

六、またどんなことをしてはいけませんか。

七、運動場に出て、どうしてはよくないでしょうか。

いっそ萎縮しちまえといっているのではないか。

人間というものは、先天的によく学びよく遊ぶようになってきている。それに教室ではその威嚇いかくしてまき的な空気が、純真な発言を妨害してよく学ぶことのできぬようにし、運動場の空気は「運動」を「労働」化せしめてよく遊ぶことのできないようにする。だから次のようにいうことができよう。

真の意味においては少しもよく学ばせ、よく遊ばせようとしない、それがこの課の精神である——と。ここにおいて、「よく」学び、「よく」遊べの「よく」が曲者だ。

「よく」とは何か。いわく、学ぶことはよいことであるが、行儀よく学ばなければならぬ。遊ぶことはよいことであるが、礼儀正しく遊ばなければならぬ。

つまりこの課の精神は、学ぶということ、遊ぶということにあるのではない、行儀や礼儀にある。学ぶということ、遊ぶということ、この人間の二大欲求に活力を与えようというのが目的ではない。この二大欲求を制しようというにある。そこに「よく」の道徳的意義があるのである。

こうした消極的な道徳教育が、ひつきよう、しんけんしんけんに学ぶこともできなければしんけんしんけんに遊ぶこともできない無力な人間を作ることにはだけ力があることはいうまでもなからう。

こうした道徳教育のなかんずく強調されている学校、たとえば師範学校（小学校・国民学校の教員を養成する一八七二（明治五）年に設立された学校）をみよ。その卒業生が、おしなべていかに無気力で消極的であるかを。

現今の道徳教育は、人間を生かすためには用いられずに、人間の気力をそぐためにだけ用いられている観がある。

人間を生かすための教育は、人間性を最も自然的に活躍せしめる意味での教育であらねばならない。よく学ばしめるに行儀等は問題でない。真に子供の知識欲を刺戟し、集注せしめる対象の有無が

問題である。そのとき行儀等はひとりでよくなるのである。

また、よく遊ばしめるについては、よく遊びうる事情、空気が必要で、そうした空空气中で、いたずらにたたずむ者はなからう。ここでは自由ということや平等ということが、深く考えられなければならない。

そうした根本的な欠陥をかえりみずに、いたずらに、「たたずんでいる子」を叱り飛ばしたり、わざとらしいところの優しい饒舌をもつて干渉したりすることは、けっして人間性を理解している教育家のすべきことではない。

理解のある教育家は、愛とは、その孤独な子供（群を離れてゐるような孤独な子供）への饒舌的干渉にはなく、愛とは、むしろその子供を孤独にした他の子供、あるいは社会環境の不正、不平等をえぐりだし、それに対して怒り憎むことにあることを知っていよう。

彼はそれらの子供をいわゆる病的な子供などとみることができない。かえって自ら健全であると思っている教師自身の思想、主観等が病的である場合が多い。

こうした深刻な反省と認識とだけが、これらの孤独な子供を、全き人間の理解と愛の中に甦らせ、その成長を鞭撻することができるのであつて、無理解の干渉よりは理解の無言のほうが、いくら教育的な効果が在るか知れない。

ゆえに、無理解の干渉の上にきずかれているこの課の教育的な意義および効果は全く零にひとしいといいたい。

時刻をまもれ

「時刻をまもれ」ということを徹底せしむるためのものとしてはこの教材は不適當である。

子供たちがこの掛図をみ、挿絵をみて、第一にひきつけられるものは何だろう。「ここにて遊びおらば課業の時刻に後るべし」といつて注意を促している正太郎の姿であるよりは、かえつてそのかわいらしい二匹の白い仔犬の姿であろう。

子供ほど動物をかわいがりその動物に心をひかれるものはない。二匹の仔犬の戯れている姿をみると、子供は直觀的に知識欲を、あるいは美感を、あるいは愛情を満足させ、成長させる。それゆえに限りない興味、限りない好奇、心がそこに芽生える。およそ興味と好奇心のあるところには、他のいかなる場合にもまさる教育、成長が、心理的に行なわれているのである。

だが、子供たちは、こうしてはならない。課業の時刻に後れる。なぜ課業の時刻に後れてはならないのか。この時子供たちの胸には「課業の時刻に後れざるようにするのは学校生徒たるもの大切な心得なり」なんてことは夢にも浮かばない。ただ彼らは思う。

「課業の時刻に後れると先生から叱られる」

先生から叱られるということだけが彼らを学校へ駆り立てる、彼らは自発的には後れることを恐れてはいない。

「学校生徒たるもの大切な心得なり」などという抽象的な理屈は、子供とは全然相容れない。子供は純真な人間性の持主であるゆえに、あらゆる道徳や行為は、純真に自己中心的に欲求される。

それゆえに彼らをして自発的であらしめるためには仔犬にまさる興味と好奇心の対象が学校にあらねばならない。

この教材は、「時刻を守れ」ということを徹底せしめるためのものとして不適當であるのみならず、事実においては、「先生からやかましくいわれるから後おくれないようにする」という卑怯な習慣を養成することに役立つだけであろう。

むしろ思う。「時刻を守れ」というよりは、「時刻は守らずにはいられない。なぜなら、他の人が迷惑するから」という相互愛——誰もが本能的にもつてる——に根ざした道德として認め、刺戟した方がよいではないか。そして、そうした意味での適切な教材を選択した方がよいではないか。

「学校より帰るときにも、父母のゆるしなくして途中に遊び、または友だちの家に立ち寄りなどで、帰るべき時刻に後るべからず」ということなども、規律の精神に基づく道德であるとするより、「親が心配するから。親がさびしいから」というような、実際のな愛情に基づく道德であるとみるほうがいくらか効果があるか知れない。

すべて、旧式な道德は、空疎な、抽象的な理想論や仮定的な項目をもとにして築き上げられた弊があるが、現代では極めて実際のな、現実的な、生活内容として認められるようになってきた。

それが教育思想の圈内にだけ依然旧式な道德があり、それが現今の道德教育として実行されているとすれば、道德教育の無効果は必然であるといわなければならない。

昔の道德教育が現今の道德教育よりは効果的であった原因の一つは、その道德教育の精神が、その時代の先駆的な道德精神たる価値を有していたからで、時代に取り残された旧式な道德精神を固

守するところの今日の学校道徳教育の無意義なことは、この一事によつても明らかであると思う。

なまけるな

- 一、亀が兎とかけっこをするとき、どんな心で急ぎましたか。
 - 二、兎は途中でどんなことをしましたか。
 - 三、兎が目を覚ましてかけて行つたとき、亀はどうしていましたか。
 - 四、亀が兎に勝つたのはなぜですか。
- 何よりもこの教材を、私自身が子供のとき、どんなふうにかえたかというお話をしたい。私は考えた。

「もし、兎も怠けず、亀も怠けなかつたらどうだろう。どんなに亀が急いでも兎に勝つことはできない。だから亀は結局駄目だ」

優等生本位の教訓、優等生に油断をするなどいましめるだけの能しかないこの話。したがつて一般の子供を救うことにはならない。

階級差別の思想を肯定し、あるいは階級差別の思想に基づく自由競争を奨励するようなことは、こんごの道徳としては排斥しなければならぬ。

怠けるな。怠けないでいると立身出世をすることができるぞ。こうした考えには、すべて立身出世している人たちは神様のような尊い人たちで、その他の一般人は劣敗者、一段低い階級の人たちで

あるという階級差別の思想が裏つけられている。

怠けるな。勉強しろ。ということが、偉い人になるために、という目標によつて強調せられているこの課の精神は、階級差別の思想に基づく自由競争の奨励であり、同時に偉い人、成功した人というものが、この世の最高の地点であるから、学問からでも金儲けからでも、その地点に達しさえすればよいという打算的な、低級な思想を植えつけることによつて、必然的に一般の道徳を悪化せしめる原動力となつているものであるということが考えられるのである。

偉い人、善い人になるための学問という考え、学問を偉い人や、善い人、功名や手柄の道具としてみている旧式なかんがえは否定せられなければならない。

学問とは真理を探求すること。これこそ純粹な学問の本質であり、意義である。

いまや、新時代の子は、功名や手柄のために学問するような学問の邪道から解放されて、学問の直接的な目的によつて立たなければならない。

宇宙には未発見の真理が満ちている。生涯を功名や手柄等の馬鹿な子供だましのようなことでついやす動物的な生活へ導き入れるような教育はこれぎりにして、こんごはもつと、子供の真の知識欲を啓発し、かぎりない究学心を広い宇宙の自然等にむかつて活躍せしめるようにしむけてやる教育が重んぜられなければならない。

怠けるな、出世がしたいならば。というよりは、怠けるな未知の世界が知りたいならば。という方が、どれほど適切で健全であるか知れない。

友だちは助けあえ

「友だちは互いに親切を^く尽くして相助け相救うべきことを教うるをもつて本課の目的とす」というのであるが、教えるという態度に基づいて選択された教材であるから、おたけの善い行ないということがこの課の眼目になっている。

しかし、友情をほんとうに自覚させ、友だちは互いに親切を^く尽くして助け合わねばならぬということを中心から思わせようというのが目的であるならば、おたけの善い行ないは抹殺して、おまつを独りさびしい雨天の学校に置き去りにしておいたならどうだろう。

おまつは傘をもたない。ほかの子供は傘をもっている。傘をもっているほかの子供たちは、もうずっと前に帰ってしまい、おまつは独り取り残されて淋しい日暮れの廊下に立っている。先生たちさえも、それを知らないで行ってしまった。

誰もいない。

こんな教材であったなら、子供たちはかえって深く感動し、しかも最も純真な意味での友情を自覚するであろう。子供たちはおまつを置き去りにした多くの子供たちを憎み、自分なら、おまつを自分の傘に入れて行ってやるのにと思うであろう。

これに反して、おたけの善い行ないには、純真な意味での友情よりは、善い行ないとしての行ないというある鼻持ちのならぬものがある。友だちに親切を^く尽くすということは善い行ないである。自分は今、善い行ないをしたのだ、という誇りがそこに芽生える。

しかし、これからの道徳はすべてが、ずっと地低く、そして至情のどん底から出たものでなければならぬ。人間の当たり前な、必然的な至情。だから善い行ないとしてことさらにほめそやされるような性質のものではない。そこには誇りもない。そうしてほめそやされないからといって、また誇りが無いからといって出てこないような、あやふやなものではない。

この課ではどうであろう。善い行ないをほめることによつて、釣ろうとしている。ほめてやるから善い行ないをせよというのである。

人間の本性は、必然的に着実であるから、こんな教材にはめつたに感動しない。したがつて、効果がない。

それに引きかえて、着実な至情を刺戟する教材には、深く動かされる。

今日の修身教育の無効果である原因が、いくどもくり返すように、人間に対する理解が欠けている点にあることは、この課のような浅薄な教材をみても明らかである。

彼らは、道徳をしゃべり過ぎる。彼らは、道徳の説教者である。けれども彼らには道徳の秘鍵を掴むことができない。

喧嘩をするな

「蝶に心を奪われて、思わずも互いにつきあたりたるならん。かかる場合には双方より詫びあうがよろしきなり。日頃机を並べて学び、手を執りて遊べる友だちの間柄にて、喧嘩するとは何事ぞ」

と教師が出てきて戒めているのには感心ができない。二人の児童は首を垂れて深く恥じ入りたりとあるが、それは教師という支配者に対して恐れ入っているので、お互い同士が自発的な意味で恥じ入っているようには考えられない。

むしろ、教師は、喧嘩けんかした子供たちを軽くあしらった方がよくはないだろうか。鹿爪しかづめらしい教訓よりはその方が、お互い同士を早く、恥じ入らせてしまう。どうせ、ここに出ているような喧嘩けんかなら、遅かれ早かれ仲直りすることはきまつている。取り立てて教訓の材料にするほどのものではないよである。

それよりも、もつと違つた、そして最も忌むべき性質の喧嘩けんかが、子供たちの世界を支配していることに私どもは注目しなければならぬ。

それは、暴力を勝ちとする意味での喧嘩けんかである。

暴力に自信のある子供というものは、たいてい相互愛の本能の薄弱な子供である。およそ私どもにこの本能が欠けているなら、私どもはもつと、いわゆる強いにちがいない。客観きゃくかんがなくて、主観しゅかんばかりなのだから、どんながむしゃらなことでも恥じ知らずなことでもしてのけることができる。ところが、その理屈がはつきりしていなくて、ある子供が他の子供を組み伏せた、あるいは惨めな目にあわせたという事実をそのまま、彼は彼に負けたのだ、というように一般にみなしている風潮は野蛮とも何ともたえようがない。

この風潮が、このまま看過されてある間は、とうてい子供たちから喧嘩けんかというものを取りのぞくことはできない。

負けるということは誰も好まない。それは多くの場合、正義が負ける、正義が暴力に負ける、ということを意味しているからである。暴力で負けたことが全体的に負けたことであるとみなされているからである。したがって正義感の強い人間は組み伏せられることを承知していながらも、やはり立ち向かわずにはいられない。しかし立ち向かいはするものの、暴力そのものに対しては彼は本質的に否定的である。ところが一方は暴力だけの人間だからどんなことでもして、そのために自ら胸を傷めたりするようなことがない。それで勝つ。そうすると彼は得意になるし、他の一般の子供たちも彼が勝つたことを認める。正義は泣き寝入りになり、負けた子供は自分の惨めさに泣く。

しかし負けた子供がはたして本質的に負けており、あるいは惨めな境遇にあるものであるうか。いな。一般の風潮、暴力の勝ちを勝ちと認める一般の風潮を排撃して、正義の勝ちを勝ちとみなすべき良風を築き上げさえしたなら、組み伏せられたくらいが何だろう。かえってそれは彼の進歩的な人格の象徴であり、他は嘲笑憫笑すべき痴漢のふるまいであるに過ぎない。「喧嘩するな」と頭かぶせにいうことによつて、喧嘩の世界にわだかまっているこうした複雑な事情を等閑に付してしまうようなことはあくまでも不可である。喧嘩の根をたやそうとならば、いたずらに概念的に、そして抽象的に教訓するよりは、「暴力の横行を懲らし虐げる」意味での適切な教材を選択して、暴力を圧伏し、正義を抬頭せしめるようにしたがよい。

およそ喧嘩のあるところには、何らかの正義と何らかの暴力とがある。「喧嘩をするな」と頭かぶせにいったところで、暴力が正義に打ち勝っている場合にあつては、けつして喧嘩がなくなるわけではない。暴力こそ喧嘩の種子である。それを圧伏しさえするなら、喧嘩はたちまち友情に変わるだろう。

どうも修身科の教材には、実際的な意味で、道徳教育に熱心であるとは受けとられないものが多い。ちよつとしたお座なりで、お茶を濁しているのではなからうか。

元気よくあれ

男女の児童が野に出て遊んでいる絵をみせて「諸子がかかる元気よき遊びをなしたることありや」と問う必要はない。彼らはきつと、もつと元気のよい遊びを野原ではしているであろうし、することができらるであろう。

しかし、「諸子よ、元気よくあるべきは、ただに遊ぶときのみならず、学校にありて課業を学び、家にありて仕事をなすときにもまた大切なり」という問題には、考えなければならぬ余地がある。

それは前の場合は、環境と自分の欲求とがよく相合つて何の努力もなしに、元気よくなるのであるけれども、後の場合にあつてはおうおうこれに反するからである。

たとえば学校の課業は、無理解な教授あるいは不完全な制度のために、おうおう知識欲の自由な発動を妨害して元気を殺^そぎ、家においてする仕事も、大多数者の家では、過労におちいるほどである。そうした環境と戦つて、なお元気よくあろうとするには、理性が必要であるが、それではその理性は何に、どんな信念に支持されなければならないだろうか。

「元気のよい人は、人としてりつぱな人である」という抽象的な信念にか？

元気は、これも人の自然性で、何らか妨害がないかぎり誰もおそらく元気であるにちがいない。

生の執着、生の本能これが元気の根源であるから。

したがって人の元気のいかんは、多く自己以外のものが支配する。

その者の環境が富んでいて、肉体的にも精神的にも圧迫や妨害をこうむらぬ子供はたいい元気で、始終飢えていて、軽蔑されている子供は元気がないのである。

だから、元気のよい人は、人としてりっぱな人であり、子供としてりっぱな子供であるということ
は、いちがいにはいえない。穩当おんとうでない。

「ものをいうには元気よく」というような僅わずかな何でもなくようなことにも、恵まれた家や境遇に人となった子供と貧家の子供とでは、それを実行する場合の努力の程度がちがう。前者はすらすらと、ごく自然に元気よく実行ができるに反して、後者は肉体と戦い、周囲の空気と戦い、あらゆるものと戦ってでなければ実行ができない、のみならずそうした努力によってえた元気は、どこか不自然で、暗いところがある。「素直な明るい子供」は最も善い子供としてほめられるが、彼らはいいて「育ち」がよいので、何の努力もなしに素直で明るいのである。したがって何もほめる必要はない。

しかし、他のどこか不自然なところのある、けれども意地のある子供こそ、賞讃に値する。彼は彼の理性によってあらゆる不合理なものと戦っているのであるから。

そして、そんな子供の理性は、「元気のよい子供はりっぱな子供である」というような抽象的な信念に基づいているよりは、多くの場合「境遇に打ち勝つてやる」というどん底の生の苦悶に基づいている。

この意味において、「元気よくあれ」「いつも明るくあれ」「いつもものは明瞭にいい、起居動作は快

活であれ」というようなこの課の精神は、極めて呑気のんきな、何の不自由もなく育った坊ちゃんれんを相手の元気の講釈で、どん底生活の子供の心理に触れ、その子供を奮い起たしめるていのものではない。元気の真相は前者よりは後者にある。それは全力的な元気で、見たところは「明るく」もなく、「ものも不明瞭」で、「起居動作」にも快活を欠くようなところがあるかも知れないにもかかわらず、その精神は確乎たるものであり、どんな困難にも、不運にも打ち勝つ。

こうした真の元気こそ鼓吹しなければならぬ。どん底の、精神の元気、これこそ称揚しなければならぬ。

したがって、教材は「どんな困難にも屈せずに進んで行く意志」「態度」等を中心に選択されなければならぬ。生の本能を奮起せしめ真の元気を意識せしめなければならぬ。

現代の道徳は、あまり末梢まつしょう的であり、表面的である。それはかえって真の元気を妨害することになる。真の元気さえ心にあるなら、いつかはそれが言葉にも、起居動作にも現われようではないか。目標は真の元気。根源はどん底にあるとしなければならない。根源には触れずに、末梢まつしょうのみを矯ためようとするところに、現代の道徳教育の欠陥はある。

行儀をよくせよ

新しい道徳の立場からいうと、ここに出ているようなことは、行儀とはみずに、至情まつじょうとして認めたのである。

至情には尊敬が伴う。尊敬は人格尊重の精神であるからすべての人に対して平等である。行儀ということになると、差別的になつてくる。父母に対する行儀と、召使に対する行儀とは違つてくる。

伯父に対して敬虔であつたお文も、召使に対してであればどうか。

今日の時代は行儀よりも至情を欲求している。至情さえあれば、それぞれの時と場所に応じて、何らか敬虔な動作になるはずである。

だのに従来 of 道徳では、表面の動作——行儀——がおもんぜられ、精神——至情——には何ら注意が払われない。マダガスカル土人の妻は、夫が帰ると手をつき膝をついて入口に匍匐して行く、そして夫の足を取つて舐めるそうであるが、これは表面上の行儀で、裏面の心持はたいい相反しているということである。

イ、人に呼ばれたる時は丁寧ていねいに返事をする事。

ロ、人の前にて耳語、あくび等をせぬ事。

ハ、すき見をせぬ事。

こんな行為も、行儀に基づく行為であるとはしたくない、尊敬に基づく行為であるとしたい。

従来のような教えかただと、そうした道徳の權威の維持されているうちはよいが、ようやく衰えてくるにつれて、反動的になる。たとえば、人の前で耳語、あくび等をしたつて構わないではないか、それが自然だからというふう。

この反動的な風潮は、古い道徳は衰えたが、新しい道徳はまだ自覚されていないという時代のも

のである。現代は一般に反動的な道德の時代である。教育家としては早く新しい道德を鼓吹しなければならぬ。

始末をよくせよ

「物の始末はよくしておかないと困ることがある」という意味においてでの教材は適切である。あくまでこうした実際的な意味に基づいて、この精神は説きたい。

けれども、この精神の裏に「だらしない人間は軽蔑すべき人間である」という世俗的な人間観がひそんでいるとすれば、それは見のがしがたい。

およそ人間の性質は一定の円に等しい。物の始末をよくしない人間は、たいてい別種の特徴——生活がべつの方面に充実している——をもっている。そうしてその特徴は多く、この現在社会の規範から脱出することによって現在社会を生活的に改造せんがための予言的意味を含んでいる場合が多い。これに反して、物の始末をよくする型の人は、多く現在の社会に^{せよくせよ}踞踏（肩身が狭く、世をおそれる）している人物である。

だから現在社会を第一としてみる保守的見方からすれば、前者はだらしない人物であるが、大局から客観すれば、進歩的、先駆的生活者である場合が多い。

今はこうした広汎な人間観が理解されなければならない。「軽蔑」「冷笑」なぞいう物の見方は、多

く小主観的で、多く社会の進歩を妨害するものであることが理解されなければならない。

こんごの世界ではすべての物の見方が広汎になる。宇宙自然に即した自由で正しい物の見方。この見方からすれば、物の個人的始末よりは、むしろ、物の社会的始末、物を簡易にし、生活を物から解放する方法が講ぜられるのである。

陋屋ろうおく(家狭い)に住んでいる者は、文化的住宅に住んでいる者にくらべると、そこらをよく始末するに
 どれだけ複雑な手間や時間が要るかわからぬ。けれど現在としてはやはり仕方がないから、それだけの手間や時間をついやしてでも掃除したり、始末したりするほかはない。

だが、そうした掃除や始末を本質的な道德行為であるとして、陋屋ろうおくに跼蹐きよくせきするより、陋屋ろうおくから解放される方法、そうして掃除や始末を簡易にする方法を講ずることが、よつほど人間的であるといわなければならぬ。

だから「物の始末」ということは道德としていたし意味のあるものではない。

わが国の道徳は、あまりに小主観的である。せせこましいことはよく知っているけれど、人類愛、真理などは全部閑却されている。この点においては宗教を用いている外国の道德教育のほうが、はるかに知的であり生活的でもある。進歩的でもある。したがって科学、芸術、道徳、あらゆる大きな発明家、人物が育ちやすい。それはせせこましい非難、排斥がないからである。

人間に対して理解があるからである。

親の恩

恩よりは愛としたほうがよくはなからうか。恩は打算的である。こんな打算的な文字を親の深刻な愛に当てはめることは、子としては忍びがたい。親としては寂しい。

もつとも古い時代の親、ことに父親は、その子が恩という言葉を使い、考え、行なうことを好んだかも知れない。が新しい親はかえって寂しく思うのである。

恩は返すことができるが、愛は返すことができない。愛は返されようとは思わない。それはそのままを愛している愛であるから。

愛は自分の愛しているものの成長をよろこぶ。しかし、それとて愛の本質ではない。愛はそのまま、いつもそのまま、そのままを愛して変わることがない。

こんな純真な愛には酬いるものがない。愛は彼のわがまま、彼の自由をよろこんでいる。愛は大きな理解だから。

愛は彼のすべての行為、善をも悪をも肯定する。愛は彼の心奥の痛みを愛し、彼とともに痛む。愛は彼の善をも悪をも肯定する。が、それは結局、彼自身の悪が彼自身の不自然にほかならぬものであることを知るからである。愛は大きな理解だから。

愛はかくも深刻、そして絶対で、無言であるから、その愛せらるる者の饒舌じょうぜつをも好まない。まして「恩」という習慣的な言葉の意味の浅薄さ、「恩」という言葉をれいれいと口にするような者は、こうした純粋な愛を享受する資格を欠くものである。

親の愛はかくも深刻で、純粋である。そのかんの消息はどうてい第三者の知り、干渉すべきことではない。

が、従来の道徳は、親と子を冷ややかな他人であるとみて、仲買人か、媒介者口調なのである。「親はこういう苦勞をしてあなたを育てた。だからあなたは、その恩義に対して酬いるところがなくてはならん。」

まるで親の愛を売り物扱いにしている。何という親の愛に対する冒瀆ぼうとくだろう。デリケートな子は、そんな言葉を何ときくであろう。

「第三者が何をいう。親の愛は自分だけが知っている」

親の愛に対する理解が、かくデリケートになつて今日では、またこの傾向を助長して行かなければならない今日では、「親の恩を教える」という態度は、時代に反するといわなければならない。これは「親の愛を感じしめる」教材に変更すべきで、いつそう深い例話が欲しく思われる。

親を大切にせよ

この例話は適切で成功している。ただ「諸子はこの話を聴くにつけても、常に父母を大切にせざるべからず」という説教意識が、せつかくこの話から受けた感動をうすめる。

こんなことはいわなくても、わかっているのに、いつてかえつて効力をそいでしまふ。

もしそんなに不安なら、「あなたがたのお父さんが、この猿の親のような目にあつたならどうだろう」というふうにでも、自然的に想像させ、自然的に親子の愛を自覚させるように仕向けよ。

修身は説教的だから効果がない。童話のほうがよほどある。それも天才的な童話であればあるほ

どある。天才的な童話は理におちない、それでいて、ちゃんと理をもっているから。

親のいいつけをまもれ

お梅と一郎は無性格者で、人を感動せしめる何もものをもっていない。

お梅と一郎が朝早くから机のまわりを掃除する態度、母がそれを見て「まことに綺麗になった」と褒め「さらに庭の掃除をしないか」というと、ただちにこれに応じたその態度、「善い坊ちゃん」というほかに何があろう。

親のいいつけを守るにも、こうしたお坊ちゃんのと、自発的なのとあるが、修身書はいつでもお坊ちゃんに味方して、「子は親の機械になれ、それが善い子だぞ」という。

したがって、子は親の愛を痛感せず、親は何の反省もしない。

しかし、ほんとうな愛をもった、デリケートな親なら、こんなお坊ちゃんの子供をみて寂しく思わずにいられようか。こんな子はたいてい先がみえている。こんな子は、若くして歪んでい

一般に素直といわれている子は、その実、歪んでいる、型にはまり込んでい

なければならない。その子に、人間的な性格があるなら、その子はあらゆる意味において、独自のなければならない。

親のいいつけを守る態度のごときも、おのずから深刻でなければならない。

たとえば、ある貧家の子は、いつも両親の顔いろをうかがっている。両親の顔いろの明るいとき

は、自分も王様になったような気がし、暗いときには、自分も暗くなるが、しかし両親を不愉快にしないようにという心づかいから、なるべく両親の目にさわらぬ部屋の隅などにおとなしくじっとしている。それがいちばん親にたいしてよいことだということを知っているからである。

しかしそんなときに親が何かいいつけでもするなら、喜びのあまり、飛び上がってその用をする。自分が何かこの場合親の役に立つことを知ったからである。親が自分を発見して使ってくれるということが彼にはうれしい。彼の胸は、親を思う心でいっぱいだから。

こんな実例はざらにある。これはいうまでもなく自発的に親のいいつけを守る態度であつて、親を思う深い心からきているのである。

「親のいいつけをまもる」行為には「親を思う心」が裏づけられていなくてはならない。したがって教材も、この点を注目して選択しなければならぬ。

だがこの教材には、「親を思う心」がまるで裏づけられていない。ただ、全く機械的である。親を思う心が裏づけられてさえあれば、親が右といえ右、左といえ左へ動いて行つても、それは機械ではない。それこそ、ほんとうに深刻な孝行であり、愛である。

しかし、ここでは、まるでそうした意味での孝行や愛はかえり見られずに、ただ親は偶像である。子もまた偶像であれといっているのである。

「父母もし物をもち来たれと命ぜば、すぐにもち来たるべし。面白き遊びをなせる折りにても、父母の呼びたるときは直ちにやめてその命をきくべし」

とはいつても、なぜその命をきくのだろうかというわけがない。偶像だからである。親は命令す

る偶像で、子はされる偶像、心理的には何らの交渉もない。

もし、強いて、心理的な交渉をもとむるならば「利己的」「打算的」な交渉である。偶像崇拜者は打算的条件つきで神を拜むのであるが、それと同じように、

「父母は諸子を褒むることも叱ることもあるべし。これみな諸子を善き人となさんがためなり。されば父母より叱られたるときには直ちに詫びて、よくその命に従うべし」

子がなぜ親の命に従わなければならないかという点、親は子を善き人となさんがための偶像だからであるというのである。親を見るには打算的に見よというのである。打算的に見た結果、親がときどき、自分を善き人になさんがためでなく親自身の都合で、褒めたり叱ったりすることがわかる。ここに不孝がはじまるのである。

親と子を打算的に結びつけている空気、古い家族主義的空氣がわるい。この空氣中では、親は叱りたくないと思っても叱らなければならない、子は親を打算的に見たくないと思っても見なければならないのである。

親は親の權威というものの手前、いかめしく子に君臨し、子はそれを偶像と見て心では嘖き出しながら、子の手前、はいはいと従う。

家族主義的空氣は眞の孝行、親思いを奨励しないで、無性格者か、偽善者かを作り、心理的には親をしてかえって萎縮せしめ、子をしてかえって悪たれさせている。

したがって、綱紀が弛むと同時に、悪たれた子供がそこからここからも出てくる。綱紀はうつらで、内面的にはたいていの子供が悪たれているからである。

だから今は、親と子の、純正な深刻な関係に注目し、そこから新道徳は生まれなければならない。

きょうだい仲よくせよ

「兄姉は弟妹を愛護し、弟妹は兄姉に従順なるよう心掛けしむるをもって目的とす」

上はあわれみ下は従う階級の道徳は、愛情を一元とする民衆的道徳にくらべると、複雑であるから、衝突をまぬかれない。

たとえば階級の道徳の骨子となっている男と女に対する階級的な見方が否定されないでいるからには弟は男であるから姉に対して優越的であるのが普通である。

これは階級の道徳が養成した争われない矛盾的な風潮で、姉と弟の関係だけでなく、また師弟の関係でもそうである。

階級の道徳では、師弟の関係は上が師、下が弟である。それにもかかわらず、その師が女である場合には一般に軽んぜられている。おなごの先生から受け持たれている男の生徒は肩身がせまいのである。

いくら、それはよくないことであるといっても階級の道徳が肯定されているからには、この矛盾衝突は避けることができない。だから、そこには多くの煩悶が横たわるのである。しかし、階級の道徳は次第に衰えてきて民衆的道徳がこれに代わろうとしている。この際、階級の道徳に立脚して上は下をあわれめ、下は上に従順であれと教えているこの教材のごときは時代に反するものであると

いなければならぬ。

民衆的道德では姉と弟をつなぐに純な愛情をもってする。姉の愛情の性質はどうである、弟の愛情の性質は服従的なものでなければならぬ、そんなことはあり得ない。ただ、ここでは、相互の愛情と相互の尊敬があるだけ。

家庭

平和な家庭は、多く民衆的な家庭で、相互を結びつけているものは階級道德であるよりは、純な愛と純な尊敬すなわち人間自然の性情によるのである。

これに反して階級的な家庭は、表面は平和でも内面はたいへい不和である。こんな家庭から、いわゆる不良な子が生まれるのである。

家庭の平和、家庭の眞面目しんめんちよくを支持しているものは階級道德ではない。階級道德にまさる人間本来の道德の發揮されている家、人がその平和を支持しているのである。

階級道德は、上を猜疑のかいらいとなし、下を不平の徒となす。すべてが暗く、利己的である。だから一朝、家族主義が壊れる、すなわち表面的な蔽いがとり去られると、たちまちすべてのものが利己的な正体をさらすのである。

人が家族主義の壊れることをおそれているのは、内心、家族主義の内部がいかに醜悪であるかを意識しているからで、平和を愛好する人間自然の性情がうわつらだけの平和でも、と望んでいるから

にほかならない。

しかし、家族主義の崩壊とは、家族が別れ別れになることではない、家族階級主義の崩壊に過ぎないのであるから、不健全なこの主義が崩壊して、相互の純正な愛情と心からの相互の尊敬から築かれる民衆的な家族の集団は、いつそう本質的に平和で、美しいものであることが了解されなければならぬ。

さきにもいったように、こんにちにあつても、平和な家庭は、たいてい、質において、民衆的な家庭で、それは子供の感化によることが多い。子供は民衆的であるから、目上の父親を打ち負かすことがある一方、目下の雇人に媚びることもある。

そうした子供のありかたが、階級道徳で冷却しているひとびとの心を温め、人間の自然性である民衆的な愛情を甦よみがえらせて、平和の基礎を築き上げるのである。

子供の感化によらぬときは、女の感化によることも多い。それは教育されない女か、教育されてもその教育から征服されなかつた女の場合が多い。

教育された良妻賢母よりは、教育されない原始的な女のほうが、家庭を楽しくする感化力に富んでいる所以ゆえんは、それが民衆的な愛情の持主であるからで、良妻賢母は階級道徳の信奉者であるため、理性的で冷たい。目上につかえ目下をあわれむ温情的な、人工的な愛情は一家の平和の基礎とはならない。

ただこの温情的な、人工的な愛情は何のために必要であるかといえ、階級を支持するために必要なのである。

階級を支持するためには、人間の利己心を利用しなければならぬ必要上、目上は目下に「あわれむ」というご馳走ちそうをする。もし、この「あわれむ」というご馳走ちそうがなかつたなら多くの目下は彼に背くであろう。つまり、多くの目下は、心からの愛情で目上に仕えるのではなくて、利己的な獲物のゆえに仕えるのである。

階級道徳では、権力者だけが利己的であるように思われているが、被支配者もみな、何らかの意味で利己的である。すべての者を利己的にしているのが道徳の本領である。

この意味において、

「目上の人にはよくつかえ、下男下女にわがままをしてはならない。わがままをしないで、あわれみ使わなければならぬ」

といつてあるこの教材が、くだんの利己的温情主義であることはもちろんである。

なぜ目上の人にはよく仕えなければならぬか。自分を世話してくれるから。よく仕えないと彼は世話をしない。なぜ召使にわがままをしてはならないか。彼は自分に仕えてくれるから。わがままをすると彼は自分に仕えない。

およそ利己的温情主義が、民衆から排撃されるゆえんは、それが衷ちゆうしん心の愛情から生まれたものでなく、利己的立場から割り出された打算的な愛情であるからにある。

「諸子もし父母、祖父母もなく、また兄弟もなく、その他世話する人もなからんにはいかばかりか悲しかるべき。諸子が楽しく暮らすことをうるは、家内のひとびとの世話を受くること多きによりなり。されば……」

何と利己的なこと。世話してくれるがゆえに父母、祖父母に意義があり、そのありがたい理由、その恩義が考えられるのである。

こんな道徳は、世話してくれる者のないことには孤独を認めるが、相愛する者のないことには孤独を認めない。

新しい道徳ではたとえその親が世話してはくれなくても、ただ生きていてくれさえすれば、どんなに嬉しいだろう。愛情において孤独であるものほど悲しいことはないのである。

しかし、階級道徳は利己心が中心であるから、「孤児は誰も世話してくれない、だから孤児はあわれだ。孤児でないものは幸福だ、だから親を大事にしなければならぬ」という。そうして、世の中というところが、いかに無情なところであるかということ、当然であるとして教える。

親が世話してくれるのはその子がさきざき親のためになると思えばこそである。だから家庭ではその子を世話する。しかし、世の中に投げ出されればそんな打算的な関係がそこにはないから、誰も見てはくれないのだ、だから世の中の人から世話してもらうためには、奉公をして主人のためになるとか、何とか、そうした関係を作らなければならないのだ、それは当然なことだ。

そこには打算だけがあつて、愛情がない。しかし人間の実際はどうかだろう。打算のまじらぬ純な愛情でその子を育てる親がどんなに多いか。また、世の中というところも、本質的には無情ではない。すべての者はみな人間愛の持主である。それを認めないで、かえつて利己的な意識だけを誇張吹聴ふいふちやうして、その悪徳を助長しているのが階級道徳であるが、さらにそうした事実すら認めずに、いぜん階級道徳一点ばりであるこの教材のごときは、けつして家庭の平和の真諦しんていを解しえない、かえつて家庭

の不和を奨励しているものであるといわなければならない。

ただし、例話には民衆的な家庭が描き出されてある。このような家庭が理想的な家庭であるとするならば、なおさら階級的教訓は蛇足で、矛盾しているといわなければならないのである。

忠 義

忠義といえば戦争。だがそれならそれでもつと適切でありたい。戦死した人の話より、むしろ、生きた手本としての廃兵に関する教材が選択されなければならない。

戦死した人が忠義なら、負傷した人も忠義であり、戦死した人が讃美されなければならないなら、負傷した人も讃美されなければならない。

だのに、廃兵に対しては軽蔑、憎悪的である一般のふうはどうであるか。

こういう生きた実例をみせつけられている子供たちに、戦場の忠義を鼓吹したところが役に立つと考えられない。従来にあつては、人心が単純であつたから、それもできたかも知れないが、こんにち以後の者は、その心がすべて複雑になつていて、「物を考える」能力をそなえてきている。

そうすれば、忠義なんてばかばかしいという気持が必然的におきてくる。戦場へ、戦場へ、忠義のために、と駆り立てられて、いざ戦場へ行き、忠義のための負傷をして帰つてくると、もう誰も彼がいかに忠義な人物であつたかということを出そうともしない。

戦争をいくどもした国には、忠義者が減るといふが、一面の真理である。日清戦争からみればも

う今は、どれだけ人間が、複雑になつてゐるかわからない。

こういうと、忠義というものは讚美され、もてはやされるといふ背景なしには成り立たぬものように考えられる。それは非常に不純であるように考えられる。が、いかにも従来の忠義というものは、そういう精神を骨子としたものであつたのだから仕方がない。

現に、この教材だつて、そういう精神の上に築き上げられ、そういう精神を利用するのが目的で編まれている。もしそうでなかつたなら、戦死讚美の教材などは無用である。もし衷心ちゆうしんからの忠義——正しい愛国心や人類愛から起る——が必要であれば他にちがつた教育の方法がある。戦争なんか末の末の問題であるから、ことさらに、もつてくる必要はない。正しい愛国や人類愛の至情さえあれば、人間は時に水火を辞しない。

だのに、こうした自覚的な忠義は省かえりみられないで、ただほめ煽おだてられての忠義であつた。それが従来の忠義であつた。ゆえに、そのほめ煽おだてる上に、不平等とか矛盾があれば、意味と力を失つてくることは当然のことといわなければならぬ。

こういうわけで、忠義の精神がだんだんと今日、失われてきていることは争われない事実である。が、この際にあつては、もはや幻滅した過去の忠義意識を鼓吹こすいしたとて、何ら役に立つわけがない。かえつて、反動的結果を生ずるのみである。

だからここに新しい忠義が説かれ、新しい愛郷の思想が養われなければならない。自分自身の郷家、われらの日本ということを一般に自覚せしめねばならない。

「民には知らしむべからず。抛らしめよ」という官僚的思想を排して、自分の物としての日本とい

う自覚をさせねばならない。いな、させるのでなくそういう自覚をするのでなくてはならぬ。

国民が国家の雇人であるならば、雇人は打算的であろうから、その国家が富み栄えていて、強くては背き去るであろう。だから雇人には、一家の秘密はなるべく知らせぬようにして、最後まで、「この家はりっぱな家だ」ということを信仰せしめることが必要であるかも知れない。

しかし自分の家となつては、長所より短所が気にかかる。それゆえ真の憂国者は日本を誇大的に考えない。むしろ、いかに困難な立場に日本があるか、また、いかに無産国であるかを省みる。かえり

そして、挙国一致の必要すなわち団結の必要を痛感する。ここにこんにちにおける唯一の忠義がある。

しかし、その団結は、正義によつてしかされない。搾取階級が民衆の生活に寄生しているままで、の団結は、とうてい考えられないことである。

忠義へ！ 真の忠義へ！ そこには広い大きな内容と意味が含まれている。それを解剖していかない以上、とうてい忠義というものは考えられないのである。

まして、戦争というものに疑いをもちはじめている時代にあつて、また、戦争をすればかならず損をするということがわかつている時代にあつて、戦争謳歌おうかに似たようなことは、教育家としては、考えてみたいことであると思う。

戦いさえすればそれが忠義という古い思想は、単純な国際関係、すべての国家と国家がそこに経済的な複雑な関係も、心理的な関係も、もっていかなかった時代にあつては通用したかも知れないが、今日のような時代では、かえつてわれわれをおとし入れるようなことにさえなる。朝鮮人さわぎの

ごとき、好適な実例であるといわなければならない。

過ちをかくすな

ここに注意しなければならないことは、「寅吉は直ちに隣の家に行き、少しも飾らず事実を告げて、ていねいにその過ちを詫びたり」

という行為の裏にひそむ心理的事実である。もし、それが過ちをおかしたというそのことのために、痛み、自ら責める心でいっぱいであればいじらしい。

しかし、「直ちに隣の家に行き、少しも飾らず事実を告げて」というのでは、過ちそのものよりは、あたかも過ちを詫びるといふ表面的な行為に正義感を持ち、それを得意になってしてのけたといふふうが認められる。

それよりは、心にすまないと思うあまり、おそれ憂えて、もじもじしている方がよほど人間的である。

表面の行為より内面の事実が、重んぜられ、理解せられなければならない。何でも詫びればよいという調子で、でくの坊のようにすぐ詫びる。こんな表面的な行為の奨励は、かえって、自責とか、憂懼とかいう、人間本来の心理的事実を抹殺するものである。

過ちを詫びよというより、過ちを自責、憂懼することが認められなければならない。自責、憂懼は、自覚的であるから、したがって「詫びる行為」へ延長するはず。

「叱られるから過ちを隠す」習慣は、「叱る」という不自然な行為が醸し出したもの、罪はむしろ、「叱る」にある。

誰でも過ちをすればわるいと思っっている。そこには自覚的な自責の芽生えがある。そこへもってきて、その自責という心理を頭から無視し、叱る、というに至っては、とうてい人間的な交渉が考えられない。そんならもう、詫びる必要もないのである。この際詫びることは屈辱でさえある。叱られたならすぐ詫びよ、とは「親のいいつけをまもれ」にもあつたが、叱る以上は人間として詫びる必要が感ぜられない。だから、叱る行為はますます自責の心を失わせるものである。

自責の心は人間自然の性情で、白痴でないかぎり、誰ももっているという事実を認めなければならぬ。

叱る、と、怒る、はちがう。叱る、は専制的で、怒る、は民衆的である。後者は多く、不正に対する正義の鞭である。だから、障子を過つて破りながら、「なに構うものか」という調子でいる子供に対して怒るのは自然である。そうした怒りは、その子に失われてある自責の本能をよびさますことになる。

自責の本能を失っている子は、たいてい上中流階級の坊ちゃんに多い。彼らは、おうおう貧家の障子を破壊しても、「なに構うものか」という調子である。

うそをいうな

この教材は、「人をだますな」に適かなっている。罐詰かんづめに石を入れて売った者がある。最初はだまされて買った人も二度目からは買わなくなった。また、そのために日本の名譽めいよがすたつた。

しかし、今日の社会は、人をだますことが、盛んである。その証拠には、罐詰かんづめに石を入れた不徳漢が何ら攻撃されないで、名譽めいよの地位にあるのである。

それは、ひとり彼ばかりが不徳漢ではなく、ほとんどすべてがそうだからである。

すべての者は人をだますことに巧みでなければ成功がおぼつかない。商人は広告、政治家は口さき、あらゆるものが人をだますことだけを考えている。

工場ではいう。労働者こそ国家の最大の功労者であると。が、その最大の功労者を遇するに罪人扱いをする。その周囲にめぐらされてある監獄みたような高い塀は逃げ出す女工を予期しているのである。

こんな社会にあつては、この教材のごときは、もつとも適切で、進んで、そうした社会を排撃し、真に人間的な社会を築き上げるように指導すべきである。

自分の物と人の物

人の物と自分の物を区別する心掛けをわるいというまい。しかし、その裏には自分の物は自分のものである。人が困つていても、自分の物をわけてやる義務はない。自分の物は自分の物で人の物は人のものだからという考えが伴つている。

この意味からみるとときには、この教材は個人主義的利己心を擁護し、その醜^かましいだす悪徳を庇^かつているものであるということが、はっきりといわれるのである。

新しい道徳では、「自分のものは人のものである」ということが考えられなければならない。

近所の人

都会ではどうか。近所相互がかたき同士のようにみえる。かえつて垣を高くして交際をしないでいるほうがよい。何か話す、交際する、それがいちいち、不純で、利己的で、階級的である。

階級的空気の中にあつては、近所相互の団結は不可能である。近所相互の団結を奨励するためには階級の打破という点に注目して、それを中心の教材が選択されてほしいと思う。

この頃小作争議がさかんになり、農村共同の精神が失われた、嘆かわしいといっているけれど、共同の精神とは何か。

もし、それが封建的意味の共同であれば、それは表面的共同であるからいつかは壊れる。すなわち今、壊れつつあるのである。

だから今後は真の共同が奨励されなければならない。それは、すべてのものが、民衆的な、同一レベルにおいて結び合う意味の共同。

近所相互の平和をかきみだすものは何であるか、近所相互のそぐわない気分の源は何かということが考えられ、それを中心の教材が選ばれてほしい。

突き進んで底から真理を掴みださなければならぬ場合にあつては、多くあいまいな芸術の様式の例話を用い、芸術的感動を必要とする場合にあつては、ためにはならぬ説教をする。こういうことは、すべて、修身書の特徴であるように考えられる。

おもいやり

「めくらよ、めくらよ、あのあるきぶりのおかしさよ」と嘲り笑っている友だちに対してこそ小三郎は怒らなければならぬのに、それをただとどめて、「目の見えぬ人はわれらのごとく面白きものや綺麗なものを見て楽しむことをえず、気の毒なるものなり、かかる人はなるべく親切に世話すべしにあらざや」などといって、盲人の手をひいてやる小ざかしい態度は民衆道徳のものではない。

すべて、不幸な人の側に立ち、その人自身になり切るところに、民衆道徳はある。他人側の親切、憐憫、れんびんそういうものは民衆にあつては悪徳である。

慈善主義婦人が、あるとき貧民窟に行つて、「あなたがたは可哀かわいそうな人たちだ」といつて溜め息をつく、「お前さんは？」といったものがある。そうすると彼女は、「これらの哀れなひとびとは心まで歪ひずんでいる。人の気持を素直に受け取ることさえできない可哀かわいそうなひとびと……」といったという話がある。

こうなると、もうまるつきりちがう二つの世界である。個人主義的道徳の尺度では、民衆道徳の深さは計り切れない。

民衆道徳は、人間相互の關係が徹底的に兄弟であらねばならぬことを要求している。彼が自分自身で自分自身が彼であらねばならぬことを。

人の不幸が自分の不幸である場合には、この世に不幸がある限り、不幸である。そこには個人的余裕がない。

すべて、個人的余裕や意識が撤廃されると、人の苦痛は自分の苦痛である。だからその人に憐れみをかけるより、その人を迫害嘲笑する者を怒る感情がさきにおきる。その人自身が感じるように、彼も感じるからである。

で、なにに怒るかというと、迫害者のもっている個人主義的感情に対してである。迫害者や嘲笑者というものは、まるつきり兄弟という情を欠いている。この情を欠いている点に怒りが生じる。だが情を欠いているものは、ひとり迫害者だけにはとどまらない。個人主義的おもいやりというものをもっている、善行というものを鼻先にぶらつかせている輩がそれである。

彼らの善行はいつも、「自分は幸福である」という前提をもち、そこから生じてくる。だが親子か兄弟が盲人で、人から迫害嘲笑されている場合を想像せよ。そういうときに、「自分は幸福である」という個人的余裕を持つことができるか。

すべて、個人的余裕から生じてくる同情は、民衆道徳では最大の悪徳である。こういう悪徳を善徳として教える、時代錯誤の好標本であるといわなければならぬ。

生きものを苦しめるな

この教材はよい。が、さらにこの教材の精神を、人間と生きものとの関係にまでおしすすめたい。「すべて必要もなき生物を苦しむるは甚だよからぬことなり」とある。必要があれば苦しめてよいのであろうか。

この問題につきあたると、ひとは、生きるためには仕方がないという哲学を持ちだす。でもこの、仕方がないという諦めあきらめの哲学くらい悪い哲学はない。仕方がないと諦めると、この哲学を土台にしてどんなことでもし、考える。

生きるためだ、当然だ、となる。彼らの運命は亡ぼされるにあるのだ。亡ぼされ、食われるということ、ゆえに彼らにあつて幸いなことであるのだとなる。こうなつてくると、それはもう完全な利己哲学である。

私は哲学を、この意味において憎む。むしろ哲学なしに、泣き、嘆き、痛みつつ、自分の悪いところに触れて行くべきではないか。それが他日、自分の悪いところを屠ほぶる動力になる。

こんにち人間が人間相互の肉を食わないように、他日において生き物の肉を食わないようになることは、考えられないことではない。

生き物の肉に対する自責が積もり重なつて行くうちには、おのずから人はその肉を好まぬようになるであろうし、また一方においては、それにかわる食料が科学の力で発明創造されるであろう。

科学の源は要求である。この要求を培つちかい育てていく上からいっても「生きものを苦しめるな」ということは、こんごはいっそう、深い意味をもって叫ばなければならないことである。

人に迷惑をかけるな

すべて修身の教えは、その教えを社会的に拡充し生かすときに、はじめてお座なりのものでない、生きた教えであるといわれるのである。でこの立場からみるときに、この教材は個人主義社会のものであるから、個人主義社会の代表階級である有閑階級、そして都会人に鼓吹しなければならぬ。そうすると、生かすことができる。

せまくるしい市中に山林を所有する者。飢餓になやむ田舎へ着飾ってはいり込む者。これらの者は、もともと個人主義社会の者であるから、これらの者に共同の精神を望むわけにはいかない。だから「人に迷惑をかけるな」という道徳こそこれらの者を救う唯一のものではないか。せめて人に迷惑をかけるないように。

田舎では共同の精神が発達しているから、いそがしい野良仕事のなかを、一人ただ着飾って出歩くようなことは、田舎の者はしない。共同精神の発達しているところではこの「人に迷惑をかけるな」という個人主義的道徳の必要はないのである。

よい子供

「これまで教えたることを取り纏めて復習せしむるをもって本課の目的とす」修身教育を知識的に取り扱うところに、第一の欠陥がある。

修身教育はその瞬間の感動を第一としなければならない。そうした感動が積もり積もると、子供は自らの人生観を作り上げる。

だが、修身教育は知識、いな、項目の機械的記憶を強い、学科として、無理に頭の中に入れて置くとするかのようなものである。

頭よりは心臓をねえ。そこが生活だ。記憶のごときは生活者の多く不得手とするところ、それは饒舌^{じょうぜつ}で表面的、内面的には空虚である。

口の修身家を養成して、それをよい子供というのか。

ことにこの賞状授与の挿絵は感心ができぬ。善行をヒヨウシヨウする、される、こういうことは滑稽ではなからうか。民衆道德は「必然」である。食欲があり、性欲があるように人には相互扶助の欲がある、人は必然的道德的であるというところに、この道德の生命はある。むしろ、道德という意味は、もはやここでは失われている。それほど「必然」そのものである。

食欲に対して賞状を授与することの滑稽^{こっけい}であるように、お互い同士の、ごく自然な愛情や尊敬やそのほかすべての情の現われに対して、賞状が与えられることは滑稽^{こっけい}である。

個人主義社会では、すべてが個人主義であるように仕向けてあり、人間自然の感情や尊敬の情は圧迫迫害されているのであるから、時たま、個人個人の交渉をつける必要があり、それに対して賞状が授与されるわけであるが、少なくともこんごにあつては賞状をもって人の善行をつるような不健全なことはしないようにし、従来麻痺していた「必然の道德性」を自治的に生かすようにして行かなければならないと思う。こう考えたから、私は「必然の道德」による、「人工的道德」の批判につ

とめてきた。民衆道德による階級道德ないし個人主義道德の批判をしたのである。

思うにこんにちの児童を昨日の道德によつて教育することは、全く不可能のことであり、また正しくないことであると思う。

(一九二七年頃)

-
- 「児童と道徳」(『高群逸枝全集』第七卷「評論集・恋愛創生」、理論社、一九六九年九月、第二刷)所収。
 - 理解を助けるために割注をつけた。
 - 読みやすさのために新仮名遣いによる振り仮名を付加した。
 - PDF化にはL^AT_EX 2_εでタイプセッティングを行い、dvi_{ps}fnxを使用した。
 - 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」
<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html>
 - 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内 「科学図書館掲示板」
<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>